

二、桜町仕法さくらまちしほう

大久保忠真と金次郎おおくばただかね

文政元年（一八一八）十一月、小田原藩主大久保忠真は江戸幕府の老中になりました。今でいうと、内閣の大臣に当たる重い役目です。京から江戸へ行くとちゅう、久しぶりに小田原にとどまった忠真は、人びとの暮らしが貧しくて心も乱れていることを案じ「領民の中から、特に心がけのよいものを集めて表彰したい。」と家臣に言いつけました。その中に栢山村からただ一人、「農民としてよく努めた。」として金次郎が選ばれました。これは金次郎が二宮家をもとのようにりっぱにし、服部家の立て直しを始めた年でした。

その後も江戸にあった忠真は、老中としての仕事をしながらも常に小田原藩の財政をどうするかということが頭からは



いというつきつめた気持ちだが、金次郎を使うことにふみきらせたのです。

文政四年の春、桜町領農村の立て直しのための調査が金次郎に命ぜられ、文政四年から五年にかけ、桜町に往復すること八回、調査は続けられました（桜町まで約二百キロ、行くまでに五日間かかります）。桜町領には、三つの村がありました。今は栃木県芳賀郡二宮町になっている物井村と横田村、真岡市の一部になっている東沼村です。金次郎は三つの村を回り、土地の様子や人びとのくらしぶりを調べてみると、あちこちに人の住んでいない家があったり、使われずに荒れ果てた田畑があったりしました。年貢がきびしいため、農民の希望も楽しみもなく生活は乱れてしまったからでした。

金次郎はその様子を見てたいへんおどろきましたが、何とかしようと調査を進め次のような立て直し計画を立てました。「今現在、四千石の土地だからといって、桜町領から四千俵の年貢を取り立てるのは無理である。その半分でも今は無理である。そこで、だんだん収穫を増やしていくのだが、全部を年貢にして取り立てられてしまったら、農民はやる気をなくし、立て直しはできない。」という結論に達しました。そこで宇津家には、収穫が多い年でも今まで通り、千俵でがまんしていただき、残りを農村の立て直しのために使わせてもらうことにしました。そうすれば十年後には、農民の生活も立ち直り、二千俵の年貢を納めることができるというものでした。つまり金次郎は、十年間のけん約を殿様にすすめたのでした。

桜町赴任さくらまち ぶん

文政六年（一八二三）三月十三日の早朝、栢山の里に、金次郎と三才の子どもを連れた妻なみをかこんで、別れをおしむ大ぜいの人びとのすがたが見られました。しかし、見送る人びとの表じようは重苦しく、とても心から金次郎を見送ることができませんでした。それもそのはずです。金次郎がこの小田原の土地を完全にはなれ、下野国（栃木県）に行くというのですから……。村をはなれるということは、家やしき、田畑をすべて処分しなければなりません。ましてや、三代にわたった二宮家をないものにしてしまうのです。とてもつらいことでした。しかし、金次郎の気持ちは決まっています。家族ともども桜町に行くようにと言われたときは自信がありませんでしたが、八度にわたる桜町の調査で立て直しに自信もつきました。また、これからの人生をかけてみようとは何度も自分に言い聞かせ、妻も金次郎の気持ちがよく分か





り、ついていく決心ができました。

かれはもうただの百姓ではなく、小田原藩から武士に近いあつかいをうけた役人としての出発でした。

三月の末には、桜町で家族一緒の新しい生活が始まりました。金次郎は、桜町領の物井村（今は二宮町物井）の陣屋で、小田原からやってきた藩士といっしょに仕事を始めました。金次郎がまず行ったのは、領内の村の家々を一軒ずつ訪ねてくらしぶりを調べて回ることでした。

家族が何人で、田畑がいくらあって、何がどのくらいとれ、何を食べているか、病人はいないか、こまっていることはなにか、とことん調べました。朝はにわとりが鳴き出すころから、夜は星が出るまで歩き回りました。かれは村人一人一人を調べ、時には、仕事をなまけている者にはきびしく注意しました。

次にしたことは、農民の表彰です。金次郎はそれを農民同士の投票によって選ばせ、ほうびには農具や米をあたえやる

気を起こさせました。こうしてまじめに働けば、認められるのだという、金次郎に対する農民の信らい感がみんなの心を少しづつ変えていきました。また、今住んでいる農民にやる気をおこさせ、農家の二男・三男や、よその土地から来た百姓をやさしく保護して、農業をする人を増やすことが必要でした。そして、用水路を掘り、せきを造ったり、排水技術を教えたりしながら荒れ地を開き、作物の生産を増やしていきました。

ところが、なかなかすべてうまくはいきませんでした。土地の境の問題や用水路の使い方についてあらそいが起こるようになり、新しく来た百姓をやさしく保護することにも不満を言う人があらわれました。この非難はこの土地の百姓からだけでなく、金次郎のやり方を納得できない小田原藩の役人たちからもあがってきました。金次郎は、桜町赴任六年目にしてきびしい反対やばう害のために、つらくくじけそうなどとても苦しい日々を送ることになりました。

成田山にこもる

なりたさん



文政十二年（一八二九）の正月、金次郎は江戸に用事があると言つて出かけたまま行方不明になってしまいました。

金次郎は、桜町での大きな障害をどうやって乗り越えたらいいか、いろいろ考え、なやみ続けてさまよっていたのでしよう。旅の

最後に下総の国（千葉県）の成田不

動尊にこもって、二十一日間の断食

修行を行っていました。「桜町の立

て直しがうまくいきますように。」と

お不動さまにいのりました。この二

十一日間の断食修行の後、金次郎

は、「人には絶対の善人、絶対の悪人というのはないのだから、真

心をつくせば分かつてもらえるはずだ。」と強く信じていることができま

した。お不動さまのようにたとえ背中に火がもえついても、決して

桜町から動くまいと固く心にちかったのです。



金次郎が、三ヶ月にわたつてすがたを消している間に、桜町さくらまちの様子も変わってきました。金次郎に心をよせて協力している人たちは、金次郎のゆくえをさがすとともに、江戸に出て、小田原藩はんの役所に行き、立て直しの仕事を続けてもらえるようお願いをしました。また、金次郎がいなくなつたことで、今まで金次郎に反対していた人たちもかえつて不安になり、反省する気持ちが起こつてきました。そして、金次郎の誠意せいいと努力が分かりだしてきました。

成田から桜町にもどつた金次郎は、桜町の人びとの協力をえて、荒れ地の開発を順調に進めることができました。越後えちご（新潟にいがた）からは、五名の百姓ひやくしやうが十九人の家族を連れてやつてきました。また、土地をもっている地元の百姓たちも進んで、荒れ地をたがやすようになりました。

天保二年てんぽう（一八三一）には、約そくの十年をむかえました。桜町はこの間に農家のうかが百六十四戸と八戸ふえ、人口は七十九人ふえました。荒れ地はへり、用水路や道路もよくなり、農家の収入しゅうにゅうもふえました。また今までやる気をなくし、なまけていた人びとも、農業の仕事に力を入れ、一生けんめい働くようになりました。年貢米ねんぐまいは千八百九十四俵びやうとなり、文政四年の千五俵にくらべて倍ばい近くとなりました。この桜町の立て直しの成功は各地に知れわたつて、金次郎の教えを受けたいとやつて来る人びとが出てきました。

しかし、桜町領内りやう三か村の立て直しは一応できましたが、まだ宇津家うつづの完全な立て直しができていなかったので金次郎は引き続き桜町に残つて指導しどうを続けました。

このような、金次郎の考えにそった立て直しの仕事を「報徳仕法」と呼んでいます。仕法には、一家の借金を少なくすることもあれば、村を立て直すこと、藩の財政を立て直すこともありました。また、仕法は、「趣法」とも「仕方」ともいうことがあります。



天保のききんてんぽう

天保四年（一八三三）の夏の初め、何日も雨がふり続けました。ある日、一軒いっけんの農家のうかで食べたナスがいつもと味がちがうことに気がつきました。今の時期のナスにしては種になるところが多く、秋ナスの味がしたのです。おどろいてその家をとび出した金次郎は、他の稲いねや道ばたの草を注意深く調べてみました。すると、どれも葉の先が弱っていました。これはただ事ではありません。土の中は夏でも、地上にはもう秋がきているということです。むかし、近所の老人たちから聞いていた「天明てんめいのききん」のときと様子が似ているので、必ずききんがやって来るにちがいないと金次郎は確信かくしんしました。

そこで金次郎は、三カ村の百姓ひやくしやうたちに「今年は凶作きようさくになる。畑いったん一反にききんに強い稗ひえをまきなさい。そのかわりに畑一反分の年貢ねんぐは出さなくてもよい。」と命じました。百姓たちは、心の中で「いくら二宮さんがえらくても、その年の米のとれぐあいが分かるわけではない。」「稗などまずくて食べられるものではない。」「よけいなことをさせる。」などと思っていました。しかし命令を聞かないとばっせられるのでしかたなく稗を作りました。

ところが、金次郎の予想は当たりませんでした。関東かんとうや東北地方いっただい一帯は雨の多い冷夏となり、やはり凶作となって、うえに苦しむ人びとが多くなりました。しかし桜町さくらまちでは、稗などを食べて過ごしたので、

だれもうえた人が出ませんでした。

この後も、金次郎は、もつとひどい凶作きようさくが必ずくると考えて、領内りやうないに雑穀ざつこく（米・麦以外の穀物・稗ひえや粟あわなど）を多く作らせ、ためて置くようにしました。やはり天保七年（一八三六）全国的に天候が不順で大凶作となり、次の年の八年にかけて各地に多くの餓死者がししやが出て、百姓ひやくしやう一揆いつきや打ちこわしが起きました。

この「天保のききん」は、関東や東北地方のどの藩はんをも苦しめました。たくさんの借金しゃっきんと荒れ地あをかかえて、うえに苦しむ農民を前にして、助ける方法も見つからず、金次郎に「仕方ほう」をたのむところが次々と出てきました。

金次郎は、ききんから人びとをすくうため、米・麦・稗ひえなどの食料を送りこんで助けるとともに、それぞれの藩はんにあった仕法の指導しどうに当たりました。





「天保のききん」は、小田原領の人びとにも大きな打撃をもたらしました。天保八年（一八三七）二月、そのころ重病だった小田原藩主大久保忠真は、金次郎に千両をわたし、小田原領の人びとを救うように命じました。

桜町から十五年ぶりにふるさとに帰った金次郎は、領内を回ってこまっている農民に食料を与えました。千両を三百七村に分け与え、またこまっている人には必要なお金を貸し出すことも行っていました。このおかげで小田原領内は、一人の餓死者もなく、四万人あまりの人びとがすくわれました。

ところがこれからいよいよ本格的な仕法を行おうとしたとき、藩主大久保忠真が亡くなってしまいました。金次郎のよき理解者で、金次郎をあたたく見守っていてくれた忠真が世を去ると、金次郎に反発する人びとが出てきました。もともと小田原藩には、ただの農民を藩の政治に参加させることに反対する意見がありました。また、金次郎の仕法は「農民は

楽になっても藩士^{はんし}の給料はへって、われわれはびんぼうになる。」とけいかいされました。そのため、農村では、金次郎に仕法^{しほう}を行ってほしいと望んでいたにもかかわらず、藩の協力をえられなくなりました。金次郎の考えた仕法は一部の農村で進められただけで、領内^{りょうない}全体の仕法は完成^{かんせい}させることができなくなります。